

学校環境における 言語少数派の子どもの言語生態保全 —「教科・母語・日本語相互育成学習モデル」の可能性—

佐藤 真紀

学位取得年月：平成22年3月

取得学位名：人文科学博士

学位授与機関名：お茶の水女子大学

【キーワード】言語少数派の子ども、言語生態学、学校環境、質的研究、
教科・母語・日本語相互育成学習モデル

【要旨】

近年のグローバル化に伴い、日本の学校環境における、言語少数派の子どもは増加・多様化の傾向にある。このように発達段階途中で文化を移動してきた子ども達は、それまで母語・母文化で培ってきたものから断ち切れ、認知的発達の中断や、アイデンティティーや情意面の不安定、また、母語と日本語の二言語不十分といった問題に直面するおそれがある。学校における言語少数派の子どもが珍しい存在ではない今日、彼らの認知的・情意的発達を保障しながら、未知の生態系へのダウンルートを支えることは、どの学校にも共通する喫緊の課題となっている。そこで、本研究では、言葉と環境とのつながりの中で捉える「言語生態学」（岡崎 2007）を理論的枠組みとし、学校環境における言語少数派の子どもの問題を捉え返し、子ども達の言語生態を保全するための生態学的支援システム構築に向けての提言を行うことを目的とした。方法としては、フィールドワークやインタビューによる質的な分析を行った。

本研究は2つのアプローチと4つの研究から構成されている。1つ目のアプローチは現状における言語生態の把握（研究1、研究2）である。研究1では現状における言語少数派の子ども達の言語観を探り、研究2では、彼らを担当する学校教員の指導観を探った。その結果、学校で母語に対する特段の手当てがない場合、子どもと教員の両者が呼応し、双方に「子どもの母語を重視しない」という現実が作り出されていることが分かった。これは、子どもの言語生態保全を妨げる一因になるおそれがあるが、国の施策自体が日本語に一面化されている中、学校環境のみで現状を変えていくことは難しいと考えられる。

そこで、2つ目のアプローチとして、地域の学習支援団体が学校に働きかけ、学校と地域が連携して学習支援にあたるという新たなプロジェクトを試みた（研究3、研究4）。その際、学校環境に「教科・母語・日本語相互育成学習モデル」（岡崎 1997）を導入した。その理由は、地域に当該モデルを導入した先行研究において、当該モデルを用いた学習では、言語が認知的、情意的、社会的、文化的に十分機能することが認められていることから、当該モデルには言語生態学的特徴があると考えたためである。しかし、当該モデルを学校環境で学校教員が実施したケースは管見の限りない。そこで、研究3では、実際に当該モデルを用いた学習支援を実施した学校教員の指導観、研究4ではその学習支援を受けた言語少数派の子ども達の言語観のあり様を探り、当該モデルが言語生態保全の一助となりうるか、また学校環境で実施可能か、という点を含めて検討した。その結果、当該モデルを用いたケースでは、教員と子どもの両者が呼応し、双方の間に「母語を使って既存能力を発揮し、学習に参加できる」という肯定的認識が形成されたことが分かった。このことから、学校環境で当該モデルを実行することが可能であること、そして当該モデルがもたらす言語生態保全とは、単なる在籍級への参加だけではなく、その過程において、母語をはじめとする既存能力が活かされることであることが示された。

本研究の結果から、言語少数派の子ども達の生態学的支援システムの構築にあたり、「①長期的展望のもと、②学校環境において、③学校と地域が連携し、④子どもが母語を使って既存能力を発揮し、学習に参加できる場を提供すること」が有効であることが示唆された。今後は、教員個人から教員集団への展開、地域と学校の連携のあり方の追求、本対象とは異なる発達段階における子ども達の場合の影響等を探り、言語少数派の子ども達の言語生態保全に向けて、当該モデルのさらなる可能性を追求していきたい。

(さとう まき)